笑い声被災地に響く!!
～被災地ボランティア記⑦～

現地でボランティアとして何をするか。個人で初めてボランティアに参加する場合は現地のスタッフの指示に従うのは当然だが、何度かボランティアを体験し、かつグループで参加する場合は「自分たちで何をするか計画を立てて来た方がいい」と大槌ベース長の古木神父は言われる。

初期のがれき処理などの肉体労働ボランティアと違い、今は仮設住宅に住む人たちへの慰問、ケアが中心である。それぞれのボランティアグループの特色がある方が、被災者も喜ばれる。

今回は大槌にボランティアに行ったことがある人が中心になって自分のできることを出し合い、準備が進められた。そして、笑いと楽しさを届けることを主眼としてグループ名を「カンガス神父と西日本のゆかいな仲間たち」とした。カンガス神父はボランティア活動などの際、手品を見せて好評で、私もカンボジア支援に行った時に見たことがある。

ただし、今まではカンガス神父だけに頼る傾向があったので、今回は全員が何かをするプログラムが作成された。私は準備会には参加しなかったが、送られて来るFAXを見て、余りに入念に準備されているのでびっくりしたほどである。

交流会はどの仮設住宅の集会所でも午前十時から午後三時までの五時間。この種の集まりを盛り上げるには、集まった人たちに、ただ見たり聞いたりするだけでなく参加してもらうこと。それも単純な動作を繰り返すことで連帯感が出てくると、自然に盛り上がる。

防府の幼稚園の先生の提案で「お笑い講選手権とお笑い体操」が参加型のイベントとして用意された。FAXでそのことを知った時「大丈夫かな？」と一瞬思った。酒席ならともかく、人前で大笑いするのはなかなか難しい。とにかく防府商工会議所からお笑い講のハッピを借り、審査委員長が使う効果音のための「ごますり棒とかなだらい」など準備は万全だ。

いよいよ一日目の仮設住宅訪問。ハンドベルなどは順調だったが、お笑い講は恥ずかしがって参加者がなく中止。準備をしてきた幼稚園の先生の沈んだ気持ちが伝わって来る。

笑うのは簡単なようにみえるが確かに難しい。その夜のミーティングで、まず我々スタッフが見本を示し、そのあとスタッフと参加者の二人一組にしたら参加しやすいのではないかということになる。

そして二日目の訪問では大成功。ちょっとした工夫で被災者の人たちも参加され、笑い声は集会所全体に響き渡った。

私も審査委員長を買って出て、思いきりすりこぎでかなだらいをたたいた。その勢いで、お笑い体操も笑いの渦を呼び「久しぶりにこんなに笑った」「ああ、楽しかった」と誰の顔も笑顔である。笑いの効用に改めてびっくりさせられた。

幼稚園の先生の「被災者の皆さんが笑って心の苦しみを吐き出してほしい」という願いは実を結んだ。

笑うこと、せめて笑顔で人と接するだけで、被災地に限らず我々の日常生活も明るくなる。

被災地で盛り上がるお笑い講

笑いの渦の中でのお笑い体操

大人の笑いで幼子も和む